

日蓮大聖人御書全集

うえのどのごへんじ

上野殿御返事

だいなんひつじょう こと

(大難必定の事)

新版
1842
く
1843

うえのどのごへんじ だいなんひつじょう こと

上野殿御返事（大難必定の事）

けんじがんねん がつ にち さい なんじょうときみつ

建治元年（'75） 5月3日 54歳 南条時光

5 月 ふつか 芋 頭 石 干 ころろ

さつきの二日、いものかしらいしのようにほされて候

いちだ 富士 上 野 身 延 やま 送 た そろろ

一駄、ふじのうえのよりみのぶの山へおくり給びて候。

ほとけ みでし 阿 那 律 もう ひと てんげんだいいち

仏の御弟子にあなりちと申せし人は、天眼第一のあなり

じゅうにん みでし ひと かしよう しやりほつ もくれん

ちとて、十人の御弟子のその一り、迦葉・舍利弗・目連・

あなん 肩 並 ひと ひと 由来 尋 見

阿難にかたをならべし人なり。この人のゆらいをたずねみ

ししきようおう もう こくおう だいに おうじ 斛 飯 のう もう

れば、師子頰王と申せし国王の第二の王子こくぼん王と申

ひと みこ しゃかによらい 従 弟 ひと

せし人の御子、釈迦如来のいとこにておわしましき。この人

の御名三つ候。一には無貧、二には如意、三にはむりよう

みなみつ

そうろう

いち

むびん

に

によい

さん

無

獵

と申す。一々にふしぎのこと候。

もう

いちいち

不思議

そうろう

むかし

飢

世

利

咤

尊

者

もう

尊

昔、うえたるよに、りたそんじやと申せしとうとき

しゃくしづつ

飢

世

なのか

齋

辟支仏ありき。うえたるよに、七日、ときもならざりける

やまざと

獵

師

ごき

い

そうら

稗

飯

が、山里にりようしの御器に入れて候いけるひえのはんを

乞

たも

獵

師

げんざい

こいて、ならせ給う。このゆえに、このりようし、現在に

ちようじや

きゆうじゆういつこう

あいだ

じんちゆう

てんじよう

樂

長者となり、のち九十一劫が間、人中・天上にたのし

受

いまさいご

斛

飯

のう

たいし

生

たま

みをうけて、今最後にこくぼん王の太子とむまれさせ給う。

こがね

おん御器

飯

常

絶

阿

羅

漢

金の御ごきにはんとこしなえにたえせず、あらかんとなら

たま

おんまなこ

さんぜんだいせんせかい

いちじ

ご

覧

せ給う。御眼に三千大千世界を一時に御らんありていみじ

ほけきようだいし

かん

ふみようによらい

な

くおわせしが、法華経第四の卷にして普明如来と成るべき

ほとけ

おお

被

たま

みようらくだいし

よし、仏に仰せをかぼらせ給いき。妙楽大師、このことを

しゃく

い

ひえ

はんかる

たも

つ

釈して云わく「稗の飯軽しといえども、有つところを尽く

たすぐ

ゆえ

ゆえ

すぐ

むく

し、および田勝れたるをもつての故に、故に勝れたる報い

う

うんぬん

しゃく

こころ

軽

稗

飯

を得」と云々。釈の心は、かるきひえのはんなれども、

他

持

尊

ひと

飢

これよりほかにはもたざりしを、とうとき人のうえておわ

進

故

ひと

せしにまいらせてありしゆえに、かかるめでたき人となれ

うんぬん

りと云々。

この身のぶさわは、石なんどはおおく候。されども、

み 延 沢 いし そうろう

かかるものなし。その上、夏のころなれば、民のいとまも候

うえ なつ 頃 たみ 暇 そうろう

わじ。また御造営と申し、さこそ候らん、山里のこと

ごぞうえい もう ろうろう やまざと

をおもいやらせ給いておくりたびて候。詮ずるところは、

思 遣 たま 送 給 そうろう せん

わがおやのわかれのおしさに、父の御ために、釈迦仏・

親 別 惜 ちち おん しゃかぶつ

法華経へまいらせ給うにや。孝養の御心か。さることなく

ほけきよう 進 たも こうよう みこころ ひと いえ 住 処

ば、梵王・帝釈・日月・四天、その人の家をすみかとせん

誓 たま そうろう 言 者 やくそく

とちかわせ給いて候。いうにかいなきものなれども、約束

違 そうろう ひとびと

と申すことはたがわぬことにて候に、さりとも、この人々

は、いかでか仏前ぶつぜんの御約束おんやくそくをばたがえさせ給たまうべき。違

もしこのことまことになり候そうらわば、わが大事だいじとおもわん

人々のせいし候ひとびと 制。またおおきなる難来なんきたるべし。その時とき「す

でに、このことかなうべきにや」とおぼしめして、いよいよ

強盛きょうじょうなるべし。さるほどならば、聖靈しやうりやう、仏ほとけになり給たまう

べし。成り給な たもうならば、来きたつてまぼり給守 たもうべし。その時とき、一切いっさい

は心こころにまかせんずるなり。かえすがえす、人ひとのせいしあら

ば、心こころにうれしくおぼすべし。恐々きやうきやうきんげん謹言しんげん。

ごがつみつか
五月三日

にちれん かおう
日蓮 花押

うえのどのごへんじ
上野殿御返事